

会報 八丈島三根会



八丈島と三根と私達！

Vol.
2
2015 5.30

第 33 回八丈島三根会開催日発行

第 33 回八丈島三根会総会

12:00 三根会総会開催 (司会 幹事長 峯元 信博)
 会長挨拶 会長 小宮山 肇
 会計報告 会計 佐藤 千鶴代
 会計監査報告 会計幹事 須藤 保
 来賓挨拶 八丈町町長 山下 泰也
 来賓挨拶 八丈町議長 土屋 博
 来賓挨拶 三根小学校校長 鈴木 勲
 乾杯 名誉会長 高橋 朝見

写真：第 32 回三根会



<歓談>

13:30 懇親会 (司会 幹事長 峯元 信博・副幹事長 小宮山 稔)
 三根伝統の踊りと歌 賀茂川会
 三根在住有志 山下 巧
 恩師紹介
 学年クラス紹介 23 年、33 年、37 年度
 懐かしのフォークダンス 有志全員
 くじ引き大会



<歓談>

14:50 校歌斉唱 (全員) 会員有志
 万歳三唱 副会長 奥山 高一
 15:00 終了



三根小学校校歌

作詞 野口雨情
 作曲 藤井清水

一、朝日はのぼり輝やきて

八丈富士の峰高く

仰ぐわれらの三根校

仰ぐわれらの三根校

二、剛健不撓の精神に

流れも強き黒潮の

沖ゆくごとく進みなん

沖ゆくごとく進みなん

三、磯うつ浪の絶ゆるなく

朝に夕べにいそしみて

いざもろともに励みなん

いざもろともに励みなん

一滴の水 大河の流れ

小沢民雄

思い出は遠く、新大久保駅高架下の小さな喫茶店、八丈島郷友会会長として役員会も終了。

三根地区出身の仲間たち数人で帰宅途中でのお茶会をもった。当時、八丈島の団体は郷友会、楳立会、末吉会の三団体。私も郷友会会長として両会の会合に招待出席したなかで郷友会とは全く異なったお互い人情味のある霧囲気を味わい、これこそ本当の地域の会合であるとの反省と自覚を新たに今まで思いつめていた三根会の結成を話題として提起、二、三十名の出席でもと思いつながら。それにしても三根地区の仲間となると余りにも人数が多過ぎることから、小学校卒業年度で区切る等等。喧々諤々話は屈折しながらも一応案内状を発送した。なんと四百名を超える出席賛同の返信。会場、経費、会の意義等、悩み多い中で八丈島に縁のある方が支配人をやっている「新宿大飯店」に決定。先ず一滴の水。第一回の会合には私の軍隊当時の知人の厚意で、かの有名な「バックシーシラカタ」のハワイアン演奏で幕開け。感謝、感動の中で三根会の誕生となった次第。私は単なる会の発案者、多くの仲間の一人一人が力を出し切り、一滴の流れを大河に変えたのが三根会と言える。

私もすでに九十一歳の消え去る一滴の流れ。発会当時、ご苦勞をかけた方々の紹介ができればと思いはすれども既に忘却の彼方。「カンベンしようよー」

- 当時行った会としての事業は左記のようでした。
- 一 三根小学校百年祭記念校歌碑の建立
 - 一 富士中学校校旗の寄贈
 - 一 八丈島福祉協議会設立基金の募金参加
- 以上、一滴の流れから今や大河永遠であることを祈りながら。

(八丈三根会発起者初代会長)

三根会によせて

三根小学校は今年六月で創立百四十年を迎えます。この間に九千名を超える卒業生を輩出してきました。今年三月二十四日に行われた卒業式では三十九名が三根小学校を卒業し、卒業生の総数は九千三百四十一人になりました。四月六日に行われた入学式では三十一名の一年生が入学してきましたが、全校児童数は昨年より九名減少しての新学期スタートとなりました。

今年度の主な行事では四月二十四日には全校で底土海岸に出かけ、砂浜で全校を九班に分けて造形活動を行います。造形物が出来上がった頃には毎年、保育園児も保育士共に鑑賞に来てくれています。五月には五年生が和泉実験農場での田植え実習も計画しています。六月にはプールでの水泳指導も始まり、九月の六年生による八重根港での遠泳まで水泳指導は続きます。八月十三・十四日には校庭で三根地区の盆踊り大会があります。毎年、三根小学校、富士中学校教員も夜店も手伝いをして参加しています。九月には全校遠足を計画しています。十月から運動会練習が始まります。十一月の運動会では、三根会の皆様に練習の成果をご覧いただきたいと願っております。一月八日の席書会が終わると二月七日の学芸会に向かっての練習が始まります。

三根小学校では常時学校公開を行っていますので、ご来島の際は是非、お立ち寄りください。

三根小学校 第三十四代校長 鈴木 勲
平成二十七年四月

運動会今昔物語

十一月三日と言えば、島の最大のイベント小
学校大運動会です。

当日、振興委員（部落長）は、朝早くから地
域の席作り、女の人は、宴会のもよくりで大
忙しです。

少子化で児童数が減少し、分団対抗リレーは
なっけごんになりましたが、「子どもは地域の
宝」という想いで、皆が声援を送る光景は今
も変わりません。

時代の流れとともに変化もあります。まんで
も運動会の華である地区（部落）対抗リレーは、
年代別でなく男女別五人の合計が百五十歳以
上、わけしゅがなっけとこは、二百歳以上
男女混合でも走るようになりました。選手が
見つからず不参加の地区が多くなってさみし
きゃの。リレーが始まると、地区の名譽をか
けた「燃える闘魂」が火花をちらし、興奮の
あまり大漁旗を持って走って応援する姿は今
もかわりんなっきゃよ。

わがえの嫁が選手で走った時は、つぶりを上
げて見られずん、完走できれば天国、ぶっこ
ろんで迷惑掛ければ地獄。まさにその時流れ
ていた曲♪天国と地獄♪のようでした。

運動場が芝生になってからは足なかを使う人、
コーナーで腕をグルグル回してとびる人は
なっけごんになりました。後の相撲も楽しみみだ



ろうがの。こづかいを握りしめて出店で買っ
た、くじ付きの甘納豆はうんまからーの。
昔は「うんがとうちゃん・かあちゃんはだい
どう？」でその子がどこの子か分かったが、
まんは、嫁がいろんな所からきていたので分
かりんなっきゃよ。

弁当も楽しみみだらーの。まだまだ貧しく、
苦しい時代だった昭和三十年代中頃、運動会
は家族・地域の誰もが楽しみにしていた行事
でした。普段は、梅干し弁当で我慢させてい
た家でも、家計をやりくりし、玉子焼きや島

寿司などの入った特別の弁当を作りました。
そごんいえば同級生がコンビーフを初めて見
て「きびがわりいおがくずのぐんだーの」と
言った事が可笑しく、ひっかすれんなっきゃ
の、そんな時代でした。

今の騎馬戦は、女子も参加で帽子を取る形式
どうが、当時は男子のみ参加で相手の騎手を
地面にぶっこすまでやりました。棒倒しで
は、棒の上から地面に落ち、棒の下敷きにな
ることもありました。そのため上級生下級生
めんなで怪我をしんのうごん工夫し、協力し
合って、日常の活動や遊びの中で、痛みや連
携の大切さを肌で体感したものでした。

人とのつながりや自然とのふれあいの思い出
が重なり、その地域は故郷になります。
わいらは何歳になっても、故郷のことを思い
浮かべます。

故郷の風景、幼なじみとの思い出が、生きて
いくことの支えになっています。
子ども達のためによけ思いでの故郷をつくる
のは、三根で育ったわいら大人の役割のよう
に思います。

「ふるさとは遠くにありて思ふもの」という詩
があります、思ふばかりでなく、せひふる
さとへおじゃりやれ。三根会が地域との虹の
架け橋になることを願っています。

三根在住 昭和四十年卒 菊池 泰彦

浅沼次作とその家族

浅沼次作は父徳治と母ヨシノの十人兄弟（男八人、女二人）の長男として明治三十二（一八九九）年に三根村神湊で生まれた。次作の父、徳次は明治時代、霞ヶ浦の精鋭隊である麻布連隊（二千人）において銃、銃剣術、鉄棒の三種競技会にすべて優勝を果たした。その手腕を買われ日露戦争の二百三高地で斥候として戦況視察を行い、その最前線での活躍によって総理府の賞勳局總裁従二位勲一等大給恒子爵より金鷄勲章と青色桐葉賞ならびに金一封を頂いている。

母のヨシノは十人の子供たちの食欲を十二分に満たす料理上手であった。しかしながら身体はとても小さく、そのせいも十人の子供達は父徳次より皆はるかに小さかった。

次作は、第十一代八丈町議会議長、三根農協・八丈島園芸農協の役員など歴任し、島の政治・経済・教育・司法など多岐に亘り貢献した。また、三根小学校の教員を昭和七年まで務めていたこともあり終生「次作先生」と呼ばれていた。末吉出身の信（ノブ）との間に二男四女の子宝に恵まれ、信は百一歳の高齢まで長生きしている。太平洋戦争が激しくなった昭和二十年頃には静岡の下田からバスで三十分程西にいった所の南伊豆町妻良（めら）に一時、父母・妻・



子供・兄弟達と疎開している。

戦後になり、八丈に戻りフリージアの品種改良に情熱を注ぎ、昭和二十八（一九五三）年には「紅輝」、昭和二十九年「富士嶺」、昭和三十四年「紫泉」など二十数種類を種苗登録した。しかし、兄弟には二百種以上の色を作り出したと伝えていた。

フリージアの原産地は南アフリカ共和国であるが、現在のフリージアの元球は、ほとんどがオランダから輸入され、八丈でそれを増やしていた。しかし、かつては、次作のように自ら品種改良を行った人もいたのであった。八丈のフリージア栽培は、むかしは花でなく球根を出荷することであった。その球根を内地の園芸農家が温室等で栽培し切花として出荷していたが、現在では、八丈島でも切花での出荷も増えてきている。

品種改良を発表した当時は世界的にも名の知られた日本を代表する研究者であった。それゆえ、毎年十名前後の大学の研究者が八丈まで訪問に訪れることが年中行事でもあった。

「浅沼次作先生顕彰碑（フリージ

アの碑）」が小崎橋（むつみ保育園近く）から尾端観音堂に向かって百五十mほど上がった左手に建てられたが、この碑の建立については、島内だけでなくむしろ大学など島外の研究者の尽力が大きかったと言われている。

昭和四十三年一月二十三日に六十九歳で亡くなったが、当時は土葬であり神湊の自宅から棺を開善院まで運んだ。その時二千人を超える長蛇の列が見渡す限り道路をうめ尽くした様は正に壮観であった。温厚な人柄で知られ、多くの人達に苗を分け与えていたので「次作先生、次作先生」と親しまれていた所以でもあった。

優秀な軍人ではあったが、非常にお人好しであったため多大な借金を抱え込むことがあった。太平洋戦争が勃発する前、八丈支庁（現在の八丈島歴史民族資料館）を建立する際に大工の棟梁の保証人となり、その棟梁がトラブルに巻き込まれたために保証人として建設費用を全額返済する羽目に陥った。その借金を返済するために次作の弟、徳雄は、尋常高等小学校を卒業すると、父と一緒に漁に出て返済の多くを素潜りで「メットウ」を収穫し、金銭を工面して二十七歳までに全額返済してしまっただ。今では信じられないが、当時は十四広（約二十m）の深さの岩壁にピツシリ「メットウ」が張り付いていて、一潜りで百個位は余裕で入るであろう「スカリ」一杯

に取れた。

戦後、徳雄は兄次作と同様に花卉園芸に身を投じ動物性堆肥と化学肥料は一切使用しない「土作りの名人」と言われ、土壌の改良を行った。花卉園芸で「アマリリス」において、タキイ種苗から日本一の折り紙を付けられ、内地の業者から白紙の小切手を出されてまで種の出荷を依頼された。また、花の「ココス」などは八丈において苗の作り手名人であり、また、「ルトジー」の露地栽培も島唯一人の作り手で、草月流の家元は徳雄の出荷日を聞いたうえで花展日を決定していた程であった。（*現在では生花市場の人が日本国中探しても誰もいないと嘆いている現実がある。）

（半年間以上収穫できる大根も作ることができ、現在でもこれ程の土作り名人は世界にも類を見ない。）

次作は花における品種改良の天才。父は日本一の斥候隊員。弟も世界に類を見ない土作りの名手。一家族の中でこれ程の逸材の輩出。八丈島にはどれほど努力と才能に恵まれた人が多いことであろうか！



わたしのイチバン

機首を少し八丈富士側へ向け翼を上下に揺らしながら飛行機は26滑走路へ滑り込む。降り立つと湿った風もやさしく迎え、「ああ、島へ帰った！」と実感する。

「四苦八苦」の言葉が示すように誰の人生にも壁がある。私は昭和45年（1970）上京し、以来東京で暮らしてきたが、

やはり様々な壁を経験した。

そのような時、八丈富士を仰ぐと父のように、海に向かうと母のように、時には優しく、時には厳しく八丈島は私を励ましてくれた。

そんな八丈島の私のイチバンは、横間洞門からの落日である。一筋の光の道が、真っ直ぐに太陽に繋がり、まるで未来へと導いてくれるかのようで勇気づけられる。

室生犀星は、「ふるさとは遠きにありて思ふもの」と謳ったが、私の八丈島は「ふるさとは遠きにありて“も”思うもの」である。

四七年度卒の幹事をやっている雨宮です。

私は三根小学校に入学はしましたが、父（博雄）の仕事の都合で五年生になる時に小笠原小学校へ転校し、卒業したのも三根小学校ではなく小笠原小学校でした。その後中学三年生になる時に八丈へ戻ってきたので、三根小学校での友人関係は復活し現在も濃厚に続けております。

三根会の幹事になり同級生に声を掛けるようになって最早十年くらいになると思いますが、毎回参加させてもらい思うことですが、島の人間関係の深さを実感します。同級生は当然ですが、親戚、お世話になった先生方にお会いすることが出来る場であり、お会いすると気持ちが幼い頃に戻りとても温かく楽な気持ちを感じます。実は私も教師をしており教師としてもこの様な会に参加できることはとても嬉しいことだと思います。

この会を続けていけるのは多くの役員の方々のお蔭だと感謝しております。今後も増々発展するために自分の学年の参加者を増やすこと、また会の将来の為に、下の学年の参加が少ないので五十歳未満の卒業生の方々への声掛けを皆さんでしていただき、増々の発展を期待したいと思います。

昭和47年度卒業 雨宮

八丈島の原住民

私は昭和21年に島で生まれ、島外での生活経験は68年間一度もありません。三根小学校では1年4組、島内での生徒数（三根小学校）では一番多く130余名だったと思います。小中学校と学び卒業後は民間で働き、昭和47年に町役場に奉職しました。57歳で早期退職し農業を楽しんでいましたが、平成18年に商工会事務局長としての声がかかり現在に至っています。

我が八丈島をこよなく愛し、自然環境の素晴らしい八丈、太平洋に浮かぶ「ひょっこりひょうたん島」、島を離れ島外での生活をされている方は、我がふるさと八丈島を偲ぶ思いは計り知れないものがあると思います。島を愛する皆さんの為にも、微力ながら島の発展の為に力を傾注したいと思います。

昨今の八丈島は少子高齢化が進み、坂上3地域の小・中学校は統合し、三原小・中学校となりました、高齢化率は上がっています。平成27年1月1日の島民人口は7,921人となり、ついに8千人を割ってしまいました。内訳には14歳以下は902人、15～64歳4,153人、65歳以上は2,866人。一時は12,000人余りあった人口、過疎化が進みさみしい限りです。

そこで我々商工会は、人口減少に少しでも歯止めをかけるために貢献したく、島内男性に島外から花嫁さんを世話する、婚活事業「島婚in八丈島」を計画し、昨年で3回目を開催しました。」第一回目（男性16・女性14）4組カップル成立し一組が結婚。第2回目（男性22・女性11）7組カップル成立し、4組が結婚、そのうち2組がオメデタです。第3回目は（男性18・女性20）11組カップル誕生して現在交際中です。この事業は八丈町の援助を受けて実施していますが、今年も開催しますので、若い女性の参加の呼びかけ協力を頂ければ幸いです。

又、東京都・八丈島が母体となる「八丈島再生可能エネルギー」事業、八丈島の地熱を利用して発電施設を官民一体となり今、建設計画を進めています。将来地球上の鉱石が枯渇しても、八丈島は地熱発電により全域を賄う事業計画です。又、この発電所から出た熱水を利用した地域振興事業（農業温水施設・陸上養殖事業・バイオマス援助事業）の取り組みを検討し、将来に向けて島で暮らす方々の為に利用拡大できる素晴らしい事業の取り組みです。

なにか偉そうな事の事例を紹介しましたが・・・。

歴史ある三根会には私はまだ数回しか参加していませんが、先輩・同僚・後輩と一堂に会して合える事は、懐かしく嬉しく島言葉の花が咲きます。閉会後は同僚仲間と2次会へ、島のつもりで酒を飲み、酔っ払って夜の東京を夢遊病者に、昔はおとなしく無口な自分が、これほど変わったのも家庭・同僚の支えもあり、ここまでの人間に成長したことに感謝申し上げます。

来年は70歳の節目の年、三根会で寄さろう仲間、酒を酌み交わしながら、同窓会の立案計画に夢と希望を持ち、我が人生の道を歩みたいと思います。

幹事さんのご苦労様を申し感謝しつつ“合掌”。

タイムマシンの風に乗って

やま

わたしが りやかーにのりました。やまがわかりんのうごん
なりました。たんくがあろうて こっちだんのうは といつて
いきました。「わたしが かんもを あつめろうて ねえちゃんが
かんもを とれ」といいました。
それから がんばって とりました。こんどは やすもごと
いって あめをかみました。「あがあ しっかりおいて おけ」
と ねえちゃんが いったのつで
「そいじゃ あがのが ちいとに なるうじゃ」といいたら
「そんじゃ いつつ おいておけ」といいました。

昭和31年12月の文集より 1年 T・S

うんどうかい

わたしは かけっこのとき 二ばんに なりました。
ほうびは ちょうめん でした。
もっていると いやになろんて おかあちゃんのところへ
もって いきました。
二にん三きやくを みました。あかも かちました。しろも
かちました。

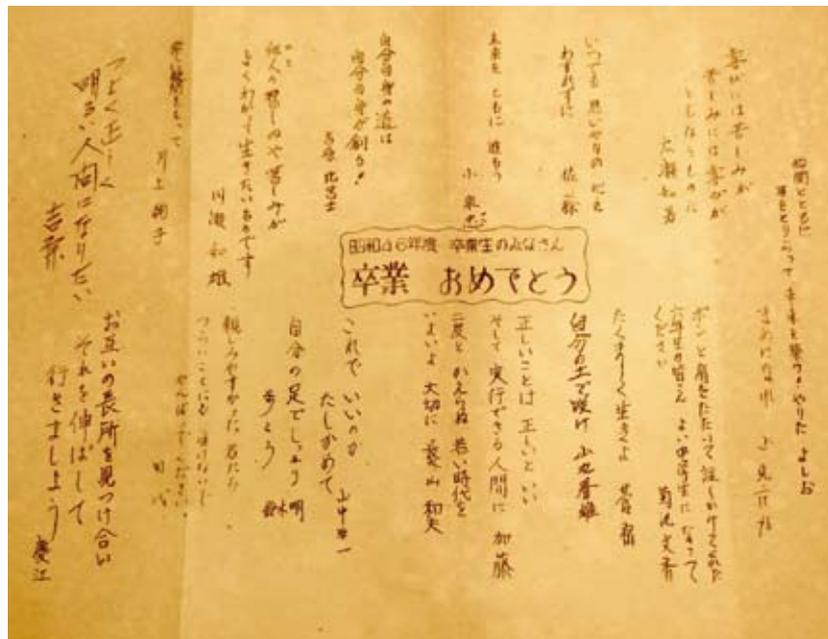
おわってから うんどうかいは まるで ごみだらけでした。
かえりながら なつとうまめを かいました。わたしは 五とうに
あたりました。けんぼうは 一とうにあたりました。わたしが
「けろよう」といいました。けんちゃんは「けろわ」といいました。

昭和31年12月の文集より 1年 O・K

<入学式>

一年生になる	入学式が終わった
小学校ってどんな所かな	おかあさんといっしょに
小学校って広いなあ	退場すると思ったのに
受付の所に行った	一年生だけ退場した
ゲタ箱大きいな	おかあさんたちはそのまま
リボンをつけてもらって	帰ってしまうかと思って
教室にはいる	泣いてしまった
しばらくたってから	今考えてみると
体育館の方へ行く	ずいぶんあまえんぼうだった
六年生は大きいな	もう中学生になる
PTA会長とかの	六年間もいつの間にか
あいさつがあったり歌ったり	すぎてしまった
よびかけをしたりして	

昭和64年度卒業生、氏名 K・K



先生から卒業生への寄せ書き

八丈島の学校の始まり

「八丈島の学校のはじまりは末吉の長戸路収蔵の安沢夕学校にさかのぼる。

これが明治5年に創立された末吉小学校の前身でもある。

続いて明治8年から10年にかけて三根小学校、中之郷小学校、大賀郷小学校、檜立小学校とあいついで創立された。中学校も昭和22年に富士中学校と三原中学校、昭和23年に末吉中学校、昭和29年に大賀郷中学校が創立され、島内に5校の小学校、4校の中学校が設立された。高等学校は都立八丈高等学校が昭和23年に創立されている。」

伊豆諸島東京移管百年記念誌より

三根は人生の出発点

豊田喜久蔵

「教員するなら八丈島へ来い！ 人情は厚いし、魚がうまい。鳥酒もうまいぞ！」と同級生の重威氏に誘われた。無津一校長から歓迎するという丁寧な手紙をいただき、昭和二十六年三月三根小学校へ赴任した。

東京下町育らの自分にとって海と山、自然に恵まれた歴史のある八丈島はすべてが新鮮でうれしかった。

学校の雰囲気は温かく、新米教師だった私は、先輩の先生方に助けられ、父兄の皆さんに支えられて卒業までの二年間を勤めることができた。

小宮山会長たちと富士山や三原山へ弁当持たせて出かけた時、海に潜って魚を突いたり、貝をとったり都会では味わうことのできない体験を重ねた。

青年団に入って、五ヶ村対抗の相撲大会のため毎晩のように土俵に通って練習したこととも忘れられない思い出になっている。

当時は、終戦後間もない時であったので島のあらこらに砲台や陣地やトーチカなどが残っていた。飛行場も荒れ果てたままだった。サイパン島から引き揚げてきた人から大変だった様子を聞かされたこともあった。

学童疎開の東光丸が神港沖で米軍の魚雷に撃沈された悲劇も知って心が痛んだ。神港の突堤に駆逐艦「潮」が使われた時は驚いた。「潮」は兄が水雷係として乗艦していたのだ。

平和が大事であることを実感した。

三根で学んだり、体験したことは、私の人生の出発点であり、八十五歳の今日でもありがたいと思っている。

三根会の益々のご発展を願っている。

(三根小二十七年度卒業生担任教師)

協賛

- ・八丈興発株式会社

協力

- ・八丈町役場
- ・八丈町立三根小学校
- ・八丈町立富士中学校